

## 「復活についての問答」

2023年10月26日

イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐことがない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活の子として神の子だからである。死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、明らかにしている。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きるからである。」（ルカ20：34～38）

敵対関係にあったファリサイ派の人々とヘロデ党の者たちが結託して、「皇帝への税金」問題で、主イエスを陥れることができると自信を持って論争をしかけたが、無残に破れた。今度は、サドカイ派の人々が「復活」問題に関して、論争を仕掛けてきた。サドカイ派はエルサレム神殿の祭儀を司る宗教集団である。政治的にはローマ支配を容認する現実派で、宗教的には、モーセ五書を尊重し、そこには「復活」の教理はないとし、復活を否定する立場に立っていた。彼らは主イエスに近寄って、復活はあり得ない、愚かな信仰だと、ある例を用いて問いかけてきた。「先生、モーセは私たちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄のために子をもうけなければならない』』」と言い始めた。これは、申命記25章5～10節に規定されているレビラート婚と言われる規定である。レビラート婚は家系を守るための規定であるが、女性を保護する意味もあるのではないか。寡婦になった人は、自立できる環境になく、夫の弟と結婚し子を産んで、子孫をつなぎ、生きることができるからである。

サドカイ派の人々はレビラート婚から、下記のように話を進めた。7人の兄弟がいて、長男が妻を迎えたが、子がないうまま死んだ。次男、三男と次々にこの女を妻にしたが、7人も同じように子を残さず死んだ。最後にその妻も死んだ。すると、復活の時、彼女は誰の妻になるのか。7人兄弟が皆、彼女を妻にした。復活は、こういう混乱が起こるので、あり得ないと言い寄った訳である。

彼らの突拍子もない議論を聞いて、主イエスはまず、「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐことがない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活の子として神の子だからである」と言われた。サドカイ派の人々は復活後を、地上の結婚生活の延長線上に捉えていた。主イエスは、復活後、結婚関係はなく、死ぬことのない天使、神の子のような存在に変えられると言われている。もちろん、私たちはこれを確証することはできない。天の世界では男女関係の喜びも、諍いからも解放されるということである。続いて、主イエスは、「死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、明らかにしている。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きるからである」と言われた。サドカイ派が教理の根幹にしているモーセ五書には「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という言葉がしばしば書かれている。族長たちは死んだけれども、天の国の宴席に招かれ、生きている。主イエスは、この世でも次の世でも、全ての人は神によって生かされると説かれた。復活を信じる律法学者は「先生、おっしゃるとおりです」と賛同した。サドカイ派の人々は返す言葉を失った。